

京鹿子

平成二十九年十二月一日発行
通巻一二〇号 毎月一回 一日発行



12月号

鈴 鹿 呂 仁
拾 掬 集 その二十七

色 鳥 来 国 の 契 り の ま ま な ら ず
滾 つ 朱 の 山 端 よ り 染 む 龍 田 姫
馬 鈴 薯 の 窪 み 核 取 り 除 け る や
馬 鈴 薯 の 愛 想 よ き 貌 四 角 ば る
空 間 に 泳 ぐ 虚 と 実 冬 櫂
冬 日 向 ド レ ミ の 空 に 風 眠 る



立冬の夕日を背に伝書鳩
残業の狐火やむささび吼ゆる
団栗の一つ転んで影持たず
風騒の鳥辺野のみち银杏散る
誰が翳も吾が影もおく系露の忌
有終の闇の引き幕虫骸
印かんの欠け字の翳や枯木立
煤逃げの四コマ漫画筋斗雲

近詠

鈴鹿 仁

花すすき

風呼べば風の容に花すすきを

大花野まぶた擦れば御曹司

雲霽れて一つ語りの鷹の山

重ね字のやうに身を措く冬籠

鷹舞ふや皆をさく事多し



近詠

和田 照海

負蝗虫

竜宮に釣鉤とられ鯨日和

露の庭赤き鼻緒の七レ卿址

八朔馬小石を嚙んで渋滞す

負蝗虫一と跳びにして陽の欠片

青北風や舳先そろへて舫ひ船



英華採集

蝸や錆びついてゐる南京錠

豊 中 宮 田 千 優

南京錠は、古代ローマや古代中国を中心とするアジアの各地を旅する商人が使っていたと言われ色々な用途に使用されていたことに始まり、今では様々な形のもが出回っている。掲句のそれは、恐らく古い土蔵に使われているものである。偶にか開けられない蔵で錆びびついている南京錠は長い年月の経過と旧家として栄てきた一時代の象徴的な物として見る事が出来る。その悠久の時間を切なく恋しく追懐するかの様に蝸が鳴いている。季語の蝸が取合せの妙を引き出している。

己が灯を水に映して恋螢

八 幡 関 東 美 佐 栄

ひとすじの光に触発されたかのようにまた別の光が生まれるとその空間にゆるやかな時が流れていく。この時間こそが幻想的な闇を形成することになる。螢が放った光は、自分をアピールする光であるが川面に映し出されたものを他の螢が放ったと勘違いする。ものの哀れを象徴するかのような恋螢であるが、作者自身に重ねられた螢であろう。

鉦叩き三日三晩の業たたく

京 都 高 橋 榮 子

庭の片隅から虫の音が、程よい間隔で耳の中へと入ってくる。しみじみと秋を感じる至福の時間である、と誰もが考えるであろう。しかし、現世の混沌とした社会を思い浮かべながら改めて聞いた作者の耳には、鉦叩きの音が人間に棲みついてゐる邪悪なものを取り除こうとしている闇の神鬼の為せる業と写ったのである。中々面白い見立てである。

松本 鷹根



笹和み

干柿や笹和みの峡日和

地卵売る柞紅葉の駐車場

沖白帆風彩りの秋桜

枯れる藻に過去を委ねて沖晴れる

恬淡と水澄む池を裁つ真鯉星月夜

近 詠

深海魚

白萩や黒きネイルの娘の祈り

風の萩ゆうらり白き深海魚

十六夜や晩年の眉くつきりと

無花果のジャム煮て少しもの忘れ

ひと抱へすすきを活けし漢の手

塩貝 朱千

神麓集

唐辛子 藤岡紫水

夕日溜め風に細身の唐辛子
小鳥来る沼は動かず光るのみ
呼び合へば届く秋晴れ瀬戸小島
消えてゆく暮光に白く菊残る
落栗の毬にみどりの残りをり

初時雨 沼田巴字

影といふもののやさしき十二月
裸木のまはりは碧い空とのみ
浮かぬ顔捨ててしまひぬ初時雨
しぐるるや野に幾条のみそぎ川
銃弾の音やはらかや木の実落つ

霊歌 丸井巴水

神獸鏡伏したるままの秋景色
青蜜柑無敗の城を斜に見て
一畳にひとつの持ち手秋土用
医学書に赤き栞を挿す寒露
とぎれなき霊歌の底で酌む冷酒

風は秋 植村蘇星

視野広し左見右見や風は秋
折々の癒やしの言葉秋の雲
秋高し昭和一桁天仰ぐ
里山のほの色染む竜田姫
列島の色香踊る竜田姫

神麓集

余 生 北川孝子

持論もつ齡となりてそぞろ寒
ほどほどてふ身の処し方や葛の花
家裏に世過ぎの匂ひ芋を煮る
ひとり居に望郷つのる雁渡し
余生かなあはあは生きて色鳥来る

百日紅 直江裕子

陽疲れをためこんでゐる百日紅
素麵やいづこよりくるさみしさか
百日もの筈なかりしにさるすべり
横切りしもののひとつや揚羽蝶
晩年はほたるぶくろの中がいい

殿 高木晶子

原爆忌煮豆一粒づつ食す
殿となりしが盆の墓参り
魂送り夜はゆつくり閉ぢる花
厄日とかまつ青な空動きをり
虫の音を明日も聞かむとして眠る

秋明菊 伊藤希眸

庭は舞台粋の限りを黒揚羽
梢を越ゆ大むらさきの逃亡劇
立秋やカフカイよいよ手に重し
女の香劣化する日の萩うねり
秋明菊ひそと並んで尻佇てり

神麓集

夏の月 木戸渥子

絶対に溶けてはならぬバースデーアイス
四分割四人きやうだい真桑瓜
九回裏同点汗はもう出ない
彫像めく青鷺の首細すぎる
死後硬直までに退院夏の月

表情筋 奥田筆子

猫じやらし元にもどれぬ表情筋
落研の枕青唐辛子かな
嫁が来て村に小鳥の樹が増ゆる
秋ざくら母は上手に共鳴す
われ一途すさびて蛸を軟化せり

秋風鈴 井上菜摘子

星とんで闇の深きが響めけり
星飛ぶやピエロの帰路の手ぶらなる
不真面目のふりして仲間糸瓜棚
秋の蝉はなればなれに置く湯呑
秋風鈴とおもへば秋のにほひける

人を濁さず 村田あを衣

神の森抜けて濁世へ日傘さす
神鏡の真ん中に立ち汗ぬぐふ
神苑の小橋小橋の瀬の涼し
萩あかりひとつ空け置く母の席
神水は人を濁さず萩真白



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

夕顔に戦の気配ひたひたと

萩の寺素心で閻魔の前に立つ

ひまはりのシングル盤が焦げ臭い

あきあかね火を付け今日を省略す

糸瓜忌や自己採点は零のまま

一礼と言ふ涼しさも嵯峨小径

竹林を抜ける風音秋意はや

紅萩を零しひとりに戻る徑

萩夕べ昔がたりに湧く瀬音

決断にふとした迷ひ走り星

京田辺 山中志津子

京都 井尻 妙子

芋の露野末の空の揺れはじむ

山峡は小さき切れ字秋の声

小鳥くる午後の紅茶はダーズリン

軽井沢へ軟着陸の草の絮

木の葉舞ふ夕陽が丘の黄金比

落鮎や真白き雲を追ひかけて

赤とんぼふやしてゆきし狐雨

ほうしほうし木木も老いたり法師蟬

澄む流れ見つめる籠の老鶉かな

水に置く月の破片のつながらず

城陽 鷺山 珀眉

京都 片山 熙子

炎屋やこゑあげて身を軽くする
とうすみの翹閉ぢしまま関ヶ原
夏衣この身の淡きたなごころ
青き夜や忍手をもて悼みとす
熊蟬のこの世喧しく謳ふ

福 山 亀井 福恵



蝸や錆びついてゐる南京錠
夕かなかな急勾配のケーブルカー
滞る灯へ五指を添ふ流灯会
踏むまじと拾ふ落蟬じいと鳴く
己が灯を水に映して恋蛩
合す手を解く如蓮の開きををり
貸農園爺が自慢の秋茄子
院通ひ秋待つ余生へネジを巻く
鉦叩き三日三晩の業たたく
国訛出さうな案山子の面構

豊 中 宮田 千優

八 幡 関東美佐栄

京 都 高橋 榮子

寝返りを打ちて無月の窓の闇
山の宿三百六十度星月夜
扇風機父と初めて将棋指す
空青し異郷に馴染む花南天
初秋や陽のあたる道キャンパスへ
少年院慰問百回秋の空
日本の梅雨想ひ浮ぶやアメリカも雨
梅雨のごと芝にしとしと空は青
見渡せば緑光るや小雨降り
森の中そよ風ふきて深呼吸
打ち上る花火や迷子アナウンス
落蟬をほうむり埋めし鉢の土
秋の蚊にやはりしぶとく螻けけり
公園に球打つ響き秋立ちぬ
子規の忌や糸瓜の一句師とあふぐ
小庭の糸瓜は句作のきつかけに
敬老の日招待状で年を知る
子規の忌短命故の心に一句
隣家から孫の声漏れ盃蘭盆会
孫去りて妻とソファアで氷菓
一人留守日記帳閉ぢ夏灯消す
樹々香る朝の散歩や蟬時雨

アリソナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

酒 田 藤波 松山

渋 川 東 秋茄子

さいたま 神田 惣介